様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６０４
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2016
課題番号：２６５８００４７

研究課題名（和文）欧米並びにアジアとの比較を介した日本近代文学及び映画における死の表象の再構築

研究課題名（英文）Reconstruction of Images of Death Represented by Modern Japanese Literature and Film in Comparison with the West and Asia

研究代表者
城殿　智行（KIDONO, Tomoyuki）

大妻女子大学・比較文化学部・教授

研究者番号：００３４１９２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　日本近代文学及び映画が死をどのように表象し、時代に応じていかにそのイメージを変質させていったのか、同時代の欧米並びにアジアにおいて生産された表象との差異として歴史的に把握することにより、近代社会において消費される死の表象の意味を、明らかにした。
　換言すれば、本研究は、言語と視覚における、二重化された表象の不可能性を介して、近代における超越的な審級のイメージ形成を対象化する歴史的な試みであった。

研究成果の概要（英文）：We consume enormous images of death in modern society. But strictly speaking, no one can tell or even think about it correctly, because death is a transcendental phenomenon. Nevertheless, there were many attempts in modern Japanese literature and film to capture the true image of death. The aim of our research was to clarify how death has been represented by modern Japanese literature and film in comparison with the West and Asia.
In other words, our research started from the double impossibility of representation. Death is always with us as a transcendental phenomenon which nobody could tell or see. We tried to find the modern way in which empiricism tied up with transcendence.

研究分野：日本文学

キーワード：死生学　表象　映画　日本近代文学

１．研究開始当初の背景

(1) 産業資本主義がグローバル・スタンダードと化し、宗教が希釈された近代の大衆消費社会における死の意味をいち早く予見したのは、ハイデガー『存在と時間』(Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Halle, 1927)である。日常世界に頽落した現存在が死への先駆的な決意によって本来性に目覚めるのだというハイデガーの実存的なシナリオは、全世界の生活様式を不可避的に一元化していく近代において生や死を考える以上、今も避けて通ることができない。

その後に書かれた死をめぐる主要な哲学・思想は、影響関係が指摘されるガダマーやサルトル、デリダだけでなく、必ずしも実存的な観点を共有しないジャンケレヴィッチや、ハイデガーの語る「本来性」に対して強く異議を唱えるレヴィナス、ラクー＝ラバルトとナンシーでさえ、おおむねハイデガーの問題圏内にあった。

また一方で、そのような思想的課題として死を考えるのではなく、むしろ社会学的な観点から、複合的なイメージの変遷として死の歴史をとらえるべきだと主張したのが、アリエス『死を前にした人間』(Philippe Ariès, *L'Homme devant la mort*, Paris, 1977.)およびそれに付随する『死と歴史』(Id., *Essais sur l'histoire de la mort en Occident : du Moyen Âge à nos jours*, Paris, 1975.)、『図説 死の文化史』(Id., *Images de l'homme devant la mort*, Paris, 1983.) 等であった。近代における死を考えるには、ハイデガー以後の思考と、アリエスのような社会学的観点の双方が必要であるように思われた。

(2) 日本においては、東京大学が 21 世紀 COE（H14-18）「生命の文化・価値をめぐる「死生学」の構築」、グローバル COE（H19-23）「死生学の展開と組織化」を推進し、広範な成果を挙げたが、近代文学や映画における死の表象の歴史的編成を主題化した学術的な研究は、いまだ不十分であるように思われた。

本研究代表者は、これまでに若手研究（B）（H18-19）「日本近代における文芸及び映像批評言説の比較考察」、挑戦的萌芽研究（H23-25）「欧米との比較を介した日本近代文学及び映画における死の表象の再構築」を代表者として行い、基盤研究（C）（H14-15）「日本近代における映像表現と活字文化・文学の重層的な相関を対象とする史的研究」（中山昭彦）、基盤研究（B）（H20-23）「戦争をめぐる表現と表象―日本近代文学・日本映画に関する中仏との比較研究」（同前）に分担者として参加してきた。

上記のごとく日本近代における文学的・映像的なイメージの編成について、継続的に研究を重ねる過程で、厳密にいえば思考することも表象することも不可能な死こそがまさに、神なき 20 世紀以後における各種イメージの量産を背後でうながしており、その様相を可能な限り歴史的に分析記述することをおいて、ほかに重要な課題はない、と考えるにいたった。

２．研究の目的

あらゆる媒体に膨大な死の表象が流通する近代において、人は単に臨床医学の限界で物理的に死ぬだけでなく、むしろそうした死の表象を情報として散漫に消費することで、実際には己の死そのものからだけは目をそらして生き、やがては決して直視しえなかった己の死という個別性自体をも、統計学的な知見に基づく臨床医学に譲り渡して、死んでいく。

現在一般化したそのような生と死のあり方こそ、近代における死の表象の生産と流通がもたらす避けがたい効果として、知的に分析されるべきではないか。1970 年代以降に臨床の場で端緒についた死生学においても、いまだに表象分析の観点は不十分であるため、文学と映画を中心とした日本近代における死の表象のあり方とその歴史性を、欧米並びにアジア諸国との比較によって明らかにしたいと考えた。

３．研究の方法

(1) 死とは認識主体の消失を意味するのだから、実際には誰も己の死それ自体を認識・経験することはできず、したがって、それについていくら考えても無意味である、とハイデガー以前の哲学や思想はしばしば指摘してきた。現在でもくり返されるそうした不可知論に対して、ハイデガーが提示したのは、何人にも代えがたい固有の可能性として、先駆的な決意において己の死をとらえ、死に向かう存在としての本来性にめざめる、という実存的なあり方であった。

宗教的な観点の多くを失った近代人にとって、死は経験を超えた語りえぬものでありながら、なおもそのような死こそが、日常世界へ頽落する現存在の忘却にくさびを打ち込み、経験の固有性をきざむのだという形で、ハイデガーはいま一度、死という超越的な審級と経験論的な次元を結びつけようとした。

換言すれば、死に対する「先駆的な決意」とは、死それ自体をめぐる思考ではなく、実存的な態度に基づいて、「己固有の死をイメージすること」を指しているのだと言える。ハイデガーは、「思考によってイメージされる死の個別性」を、近代における認識の地平を構成する必須の要件として、以後の哲学・思想に組み込んだのであり、本研究もその前提を共有した。

(2) また一方では、アウシュヴィッツやヒロシマによって表象されるがごとき、あまりに莫大であるがゆえに、もはや統計学的な観点からの分析をも許容せざるをえない、20 世紀以後に固有の「量的な死の脅威」とはまた別の意味において、「固有の死」というイメー

ジが、現代では大きく揺らいでいる。たとえば脳死判定と臓器移植や、延命治療と終末期医療をめぐる複合的な問題群は、法医学的・生命倫理学的・臨床医学的な観点から、個人の死とは何か、つまり死の個別性とは何かを、再審に付している。それを考えるためには、言語的に思考される死のイメージを、ハイデガーとは別の形で、構想しなければならない。

したがって本研究は、日本近代文学を対象にするが、単に物語として描かれた死や、心理的に描写された死の恐怖を問題にするのではなく、ある作家や作品が、意識的であるか否かにかかわらず、（死という）超越的な審級をどのような形で経験論的な次元に導入しようと試みているのか、といった言語的な思考の臨界におけるイメージ形成を主題にした。従来の宗教学や民俗学とは異なる意味で、超越的な審級の折り込みを問題視するそのような文学テクストの分析は、バタイユやブランショを除いてあまり類を見ず、殊に日本近代文学研究においては、ほとんど見受けられなかった。

(3) クロード・ランズマン監督『ショア』（1985）及びショシャナ・フェルマン『声の回帰―映画『ショア』と「証言」の時代』（Shoshana Felman, “Film as Witness: Claude Lanzmann's Shoah,” Geoffrey H. Hartman (ed.), *Holocaust Remembrance: The Shapes of Memory*, Cambridge, 1994）は、ナチスによるホロコーストを半ば意図的に映し／語り損ねることにより、即物的な死体はいくらでも写すことができるが、死そのものは決して映すことができない、という形で死の表象不可能性を主題化した。つまり、映像を歴史的に分析する際にも、（死という）表象の不可能性をどのような形で視覚的な次元に導入しようと試みているのか、といった映像的な思考の臨界におけるイメージ形成を主題にする必要がある。こうした観点における日本映画分析もまた、あまり例がなかった。海外に先例を探せば、ジジェクの精神分析的な映画論（Slavoj Žižek, *Looking Awry: An introduction to Jacques Lacan through popular culture*, Cambridge, 1991. Id., *Enjoy Your Symptom!: Jacques Lacan in Hollywood and Out*, London, 1992.）が超越的な審級のイメージ形成を問題にしているが、実際にはラカンによる精神分析理論の祖述にとどまる。

(4) 前述の各観点を前提し、言語的な思考の限界と、視覚的な表象の不可能性という、二重の意味における経験論的な臨界をたがいにつきあわせることで、死という超越的な審級のイメージ形成を探る試みは、日本に限らず、文学や映画の分野で、先行研究があまり見られなかった。あえて先行研究を探せば、視線と言葉の乖離によって近代が編成される過程を分析したフーコー『臨床医学の誕生』（Michel Foucault, *Naissance de la Clinique: Une archéologie du regard médical*, Paris, 1963.）および『言葉と物』（Id., *Les Mots et les Choses: Une archéologie des sciences humaines*, Paris, 1966.）を挙げられるが、フーコー自身は映画という視覚的な表象にさしたる注意を払わず、また特定の作家によるごく限られた文学作品以外には、興味を示さなかった。

そこで、日本近代文学及び映画が死をどのように表象し、時代に応じていかにそのイメージを変質させていったのか、同時代の欧米並びにアジアにおいて生産された表象との差異として歴史的に把握することにより、近代社会において消費される死の表象の意味を、明らかにしうるのではないかと考えた。その意味で、本研究は、言語と視覚における、二重化された表象の不可能性を介して、近代における超越的な審級のイメージ形成を対象化する歴史的な試みであった。

具体的には、研究全体を以下に記す４つの観点にあらかじめ腑分けした上で、それぞれに進捗段階を設定し、多面的な研究を並行して、構築的にすすめた。４つの観点とは、①超越的な審級のイメージ形成を対象化する理論の整備、②日本近代文学作品の資料収集・分析とその歴史的な位置づけ、③日本映画・映像作品の資料収集・分析とその歴史的な位置づけ、④欧米並びにアジアにおける映画・映像作品の資料収集・分析とその歴史的な位置づけに基づく日本との比較、であった。各論点に関連して、前述したアリエスのイメージ論検証を目的とするバーゼル市立美術館における調査を始めとして、各種の資料調査を予定した。

４．研究成果

(1) 平成 26 年度は、研究実施計画に基づき、死生学に関連する表象理論の構築に努めるとともに、日本および各国における映像・言語資料の収集と分析を行った。また、両者を結びつける形で、関連する内容の一部分を、「見えない傍観者―溝口健二と「あまりに人間的な」映画」と題して公表した。

日本近代における表象システムの１つの転換期と見なしうる、1930 年代の代表的な映画作品『残菊物語』および『元禄忠臣蔵』を主要な対象として、欧米における溝口健二論の定型を形づくっていた、「黙説法」の評価を中心とする解釈に根本的な批判を加えることで、認知理論にもとづく映像分析方法に異議を唱え、また一方では従来の精神分析的な映像解釈を読みかえた。

たとえばボードウェル（David Bordwell, “Mizoguchi and the Evolution of Film Language,” Stephen Heath and Patricia Mellencamp(ed.), *Cinema and Language*, Frederick, MD, 1983.）や、デイヴィス（Darrell William Davis, *Picturing Japaneseness: Monumental Style, National Identity, Japanese Film*, New York, 1996）は、溝口が 1930 年代に作り上げたスタイルを、きわめて「日本的」な表象様

式であると高く評価していたが、被写体の直視を映像表象の規範として前提する彼らの解釈は、典型的なエクゾティスムであると指摘されるべきであり、そもそも映像とは、表象されえない要素との関連においてのみ、実定的な意味をになうのではないかという発想を、根本的に欠落させている。

そのような認識上の欠落こそが、むしろ決して直視しえないもの、つまりは死そのものから視線を逸らして、それを代替する散漫なイメージのみを量産する（ハリウッド）映画製作を可能にしているのではないかとも敷衍しうる。したがって、溝口健二監督作品を本研究課題の事例として取り上げ、また殊に1930 年代作品に焦点を当てた平成 26 年度の研究実績は、その後の研究全体の推進にとって、核となる意義があった。

また、戦後の政治的・思想的な転換期と見なされる 1960 年代末の、日本文学と映画における構造的な変化を主題として、「高倉健と第九条―三島由紀夫の夢見た長ドス」を公表した。日米安保批准を背景に、構成員間の殺傷行為へ帰結する新左翼学生運動を形成した心的な素地と、その時代に象徴的な役割を担わされた俳優高倉健、および構造的に虚無を描きつづけ、やがて自刃する三島由紀夫との間にみられる意味的な連関には、日本特有の問題が指摘しうる。死のイメージを主題化する本研究にとって、現代にいたる日本の特異性を再考する意義があった。

(2) 翌平成 27 年度も、研究計画に基づき、死生学に関連する表象理論の構築に努めるとともに、日本および各国における映像・言語資料の収集と分析を行った。また、両者を結びつける形で、関連する内容の一部分を、「輝く太陽の下で―谷崎潤一郎の「関西」と増村保造の「ローマ」」と題して公表した。

谷崎は日本近代における映像と言語表象の関連を考える際に避けて通ることができない存在であり、本研究代表者もこれまで継続的に谷崎を論じてきた（「云ふ迄もない話―谷崎潤一郎『吉野葛』論」『文学』 8(4)、157-166 頁、1997・10、「他の声 別の汀―谷崎潤一郎『蘆刈』論」『日本文学』48(6)、39-49 頁、1999・6、「映画と遠ざかること―谷崎潤一郎と『春琴抄』の映画化」『日本近代文学』61、59-72 頁、1999・10、「消された眉―泉鏡花と溝口健二の「映画的」文体」『大妻国文』44、107-126 頁、2013・3)。

今回は戦後の日本映画史において非常に重要な位置を占める監督増村保造との対比において、再考した。そもそも増村自身が、谷崎を溝口健二との関係においていち早く論じた批評家でもあった。関東大震災を期に関西へと移住した谷崎と溝口に通底する創作意識・方法の大きな転回を指摘した増村の論点は、その後も複数の研究者に引き継がれているが、なぜ増村がそれを指摘する必要があったのか、その意義はあまり顧みられることがなかった。そこで、異文化圏への越境を契機に創作の質を転回させた増村自身の経験と対比させながら、戦前から戦後にいたる言語および映像表象の史的変化をあらためて論じた。日本における言語および映像表象システムの相関を主題とする本研究全体の推進にとって、有意義であった。

(3) 最終年度にあたる平成 28 年度は、研究計画に基づき、死生学に関連する表象理論の構築に努めるとともに、日本および各国における映像・言語資料の収集と分析を行い、研究の総括を試みた。研究成果の一端は、日本における死の文学的なイメージを主題化した立尾真士著『「死」の文学、「死者」の書法―椎名麟三・大岡昇平の「戦後」』への長文書評として、また本研究による既出論文「見えない傍観者―溝口健二と「あまりに人間的な」映画」を、政治的かつ歴史的な観点から再考する長文補注として、公表した。

前者では、ハイデガー、デリダ、ジジェク、ヘーゲル等に合目的的な哲学根拠を求めながら、日本文学における死のイメージを論じた著作に対して、論の前提・方法・論理のいずれにも疑義を呈し、近現代哲学や思想史はむしろ、理念的に合理化・目的化しえない、思考の盲点をめぐる営みとして歴史的に形成されてきたはずではないのかと指摘した。

後者の「天覧と遙拝―「見えない傍観者」補注」では、作中人物や観客の視線を複雑に折り込んで撮られる溝口の諸作が、作品に内包される緊張度の極点において、しばしば視線の放棄を描き出すのだと指摘した本論をふまえ、画面に表象されたそのような抑圧は、明治期以降の日本における国民の視線および主体性の簒奪と臣民化をもくろんだ視覚文化施策に酷似しており、両者には相同性が指摘しうるのではないかと論じた。

その意味では、他文化圏との差異をふまえつつ、日本近代における言語的・映像的な死の表象の再構築を目的とした本研究は、当初、哲学的・認識論的な前提を重視して出発しながらも、結果としては、より政治的・歴史的な観点に基づく表象分析の必要性に帰着したわけであるが、研究の進捗に応じて新たに見出された課題とともに、本研究の成果には、他文化圏における表象分析と比較しても、独自の意義が十分に含まれるのだと信じる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 城殿　智行、書評 立尾真士著『「死」の文学、「死者」の書法―椎名麟三・大岡昇平の「戦後」』、日本文学、査読有、65 巻 9 号、2016、76-79 頁

② 城殿　智行、天覧と遙拝―「見えない傍

観者」補注、人間生活文化研究、査読無、26 号、2016、108-110 頁

③ 城殿　智行、見えない傍観者ー溝口健二と「あまりに人間的な」映画、大妻女子大学紀要ー文系ー、査読無、47 号、2015、89-115 頁

④ 城殿　智行、高倉健と第九条ー三島由紀夫の夢見た長ドス、ユリイカ、査読無、47 巻 2 号、2015、133-142 頁

〔学会発表〕（計１件）

① 城殿　智行、盲目と盲従－谷崎潤一郎と溝口健二－、大妻女子大学比較文化学部研究発表懇談会、平成 28 年 6 月 27 日、大妻女子大学比較文化学部棟（東京都多摩市）

〔図書〕（計１件）

① 城殿　智行、五味渕典嗣(編)、日高佳紀(編) 他、谷崎潤一郎讀本、翰林書房、2016、356(144-150)頁

６．研究組織

(1)研究代表者

城殿　智行（KIDONO, Tomoyuki）

大妻女子大学・比較文化学部・教授

研究者番号：００３４１９２５